In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	琦君恋愛小説の重複描写について ： 類似した物語における少女の役割
Author	徐, 叔琳
Citation	中国学志. 34 巻, p.49-72.
Issue Date	2019-12-20
ISSN	0913-3151
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学中国文学会
Description	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

琦君恋愛小説の重複描写について
——類似した物語における少女の役割

徐　叔琳

【論文提要】

綜觀琦君一生所創作的71篇小說，絕大多數都是與婚姻關係及親情有關，且相似的劇情及人物設置，總是在不同的小說之中反復出現，此為琦君小說創作的最大特點。本文主要探討在婚戀三角形（一對夫妻及一名從中介入的第三者）裡，少女（夫妻所生的女兒）在父母的婚姻關係所起到的功能與象徵。〈完整的愛〉講述了少女因雙親失和而導致的自我身份認同的缺失;〈琴心〉中通過曲譜的補完，使因喪偶而導致的兩個破碎家庭重新被修復。〈長相憶〉裡時刻關注著父親舊情人動向的少女，象徵著母親無意識下，為實現自我願望所投射出的另一個自己。〈快樂聖誕〉顯現了少女內在的「男性面」與「同性戀」的一種可能性。

0. 問題の所在

国民政府が国共内戦に敗れ、台湾に撤退したその時点で、中国大陸から台湾に移った数多くの中国人は、「外省人」という。それぞれの生まれた故郷を離れ、風土や気候が全く異なる南の島・台湾に遷居した外省人の作家たちは、故郷の風景や家族を追憶しようとした。この特殊な歴史的原因から生じた作品は「懐郷文学」と呼ばれている。

外省人の作家には女性も何人かいる。例えば、聶華苓、徐鍾珮、張秀亞、潘人木、孟瑶、琦君などが、五十年代に有名な外省人女性作家として知られている。その中でも、琦君は最も代表的な人物だと言える。

琦君作品で最も読者によく知られているのは、故郷の浙江省永嘉にいた家族や知人を描いた散文である。しかし、琦君は散文だけでなく、詩詞、小説、台本、評論も創作範囲にあった。本稿は、その中でも創作数が71篇にのぼる小説を取りあげる。その内容から大きく以下の三つに分けられる。

（１）民国初期、中国大陸における大家族制度下の家族内部の諸問題を摘出する小説。
（２）旧社会と五四運動以降の新社会の、両方の影響を受けた男女の恋愛観を描写する小説。
（３）1949年以降、国共内戦に敗れ、台湾に移転した国民政府に属する公務員と教員の当時の生活現状を現す小説。

これらのいずれの題材にも、濃厚な「琦君式特徴」が現れる。本稿が注目するのは、（２）の恋愛物語である。この種類の小説は、三つの特徴を持っている。つまり、重複描写、少女の登場と第一人称の視点である。本稿では、琦君小説における類似した物語における第一人称の視点と少女という登場人物の機能を分析したい。

1. 琦君と琦君小説の研究現状

1.1. 琦君の略歴

琦君（1917-2006）は近代中華圏の重要な女性作家である。琦君の本名は潘希珍で、幼名は春英。浙江省永嘉県（現在の温州市）の地主の出身。父の潘鑒宗（実は伯父）は民国初期の有名な軍人。父と母の結婚は、その両親が勝手に決めた「包辦婚姻」である。母親は夫のことが気に入ったのに対して、父親はこの「包辦婚姻」に対する多くの不満を抱えていた。

軍人である上に、日本への留学経験を持つ知識人である潘鑒宗は、娘への教育を非常に重視する。彼は家庭教師を雇い、琦君に漢詩や漢

文などの作法を教えた。こうした何年も続いた厳しい訓練は、中国古典文学の基礎を固める。中学時代の琦君は、既に作家としての才能を現わし、1935年に処女作「我的朋友阿黄」が、当時の雑誌『浙江青年』に掲載された。大学への進路を決める際、琦君は北京大学で欧米文学を学びたかったが、父親が反対するため、結局実家に近い之江大学の中文系に入学せざるを得なかった。

大学在学時に、両親が相継ぎ亡くなったため、琦君は一旦学業を中断し、杭州から永嘉の実家に帰り潘家の喪主として葬式を執り行なう。その後まもなく、日中戦争が始まり国共内戦が続いた。1949年、琦君は国民政府と共に台湾にたどり着き、裁判所（台湾高院司法行政部）で働いた。同年、散文「金盒子」を発表し、作家としてデビューした。その散文のお陰で、琦君は同じく外省人の李唐基（1921-2013）と出会い、まもなく結婚した。二人の間に、一人の息子がいる。

1954年、短編小説と散文を収めた最初の作品集『琴心』が出版された。それ以来、琦君は裁判所と大学で仕事をしながら、創作を続け、林海音、張秀亞などの有名な女性作家とも友人になった。1990年、中華圏に広く知られる中編小説「橘子紅了」が発表された。その作品は、2001年に台湾公共電視台によって、テレビドラマとして実写化された。

1.2. 琦君小説の研究現状

膨大な作品数にもかかわらず、[1] 同世代の外省人の女性作家と比べると、琦君作品に対する研究は、圧倒的に少ない。修士論文は37篇[2] あるが、博士論文は一篇もない。また、琦君及びその作品に対する学術討論会表[3] に収録された論文も、主に琦君の随筆についての評論が

---

1) 小説を収録されている作品集は23冊があり、小説の数量は71篇に至る。

2) 2018年11月までの調査データである。

3) ここで言及した学術討論会は、新生代論琦君：琦君文学専題研究（2006年）と永恆的溫柔：琦君及其同輩女作家学術研討会（2006年）である。両者とも小

主で、小説を対象とする論文は僅か10篇しかない。よって、琦君小説に関する専門的な研究は非常に不十分だと言える。

琦君小説が長年にわたって重視されてこなかった原因は、以下の三点である。（１）小説の全般的な構成が簡単すぎること、（２）同じのような人物像が繰り返し出て来ること、（３）同じような物語が繰り返され、新しい題材が生み出されていないこと、である。このような批評の代表的な例を引用しよう。

> 彼女の創作における題材の範囲は余りにも狭く、いつも同じ物語が繰り返されている。つまり欠損した愛だ。（中略）琦君が描く人物も僅か数人にすぎない。（中略）その数人はよく書けていて感動的であるが、どの作品にも、いつも同じ人物像が出て来ると、なぜ作者はもっと多くの人物を作品に登場させないのかと責めたくなるのだ。人物描写は、作者が努力して発掘することが必要だ。この狭い世界に閉じこもっていてはいけない。文壇から声なく消える作家の主な原因は、新しい人物や物語を発掘し創作しないことだ。つまり、一篇か二篇を読めば悪くないと思う作者も、更に読むと千篇一律に感じる。その原因は、作家がいつも自分の狭い世界の中でしか創作しないからだ。[4)]

説を研究対象とする論文は五本ずつである。

4)　葉婆「琦君的『菁姐』」（隱地編『琦君的世界』爾雅、1980年）、123-124頁。原文は「她的寫作圈子實在太狹小。在故事上都是那一個故事在翻新，也就是殘缺的愛……琦君在人物的描寫上也僅是幾個人……這幾個都寫得非常成功和動人，但是我們可以看出在這不同篇幅而同一型的人物出現時，就有點責備作者為什麼不把更多人物的生命給予在每篇作品裏呢？這些人物的刻畫是需要作者再努力去發掘的，不能僅限在這小小的圈子裏，一個作家停了幾年就無聲的倒下了，其主要的因素是作者不肯去發掘和創造更新更多的人物和事物。這也就是：有的作家讀他一二篇作品還好。讀多了就似乎千篇一律了，這個原因就在於作家總是

この引用から分かるように、琦君の小説が評論家に最も非難されるのは芸術性の欠如である。琦君の小説における芸術性の欠如は、琦君小説の研究が長年来、評論家の興味を惹かない一つの原因だと推測される。この芸術性の欠如は、作家にとって致命的な弱点とも言える。しかし、それだけで琦君の小説が研究する価値がないとは断言できない。

2. 琦君小説における重複描写

2.1. 重複描写の原因

本章では、筆者が琦君の書いた71篇の小説を整理し、創作上の共通性と特徴――それは長年来、評論家によって批判されてきた琦君特有の癖でもあるが――のいくつかに気づいた。この共通性と特徴にこそ琦君小説を読み解く鍵があると思われる。

琦君は随筆にせよ、小説にせよ、同じ人物や主題を繰り返すという傾向がある。それは次のように評論家の分析する通りである。

> 彼女の人生と創作に対する考えにもとづき、彼女の題材はほぼ自分の思い出に取材したものである。第一人称と倒叙手法もよく使われた。よって、これが読者に親しみをもたらすと同時に、構造上、物語上の類似現象も引き起こし、人物の真実性を減殺している。[5)]

琦君は自分の小さい世界（創作の題材）から踏み出すのを嫌がり、自分と違う世界の人々と接触するのも好まなかった。それは、恐らく

在那一個小圈子裏翻新。」

5) 司徒衛「琦君的『菁姐』」（隱地編『琦君的世界』爾雅、1980年）、118頁。原文は「基於她對人生與創作的觀點，她的題材似乎大半取之於回憶，而又習慣採用第一人稱及倒敘的手法。這樣，固然有時候給我們以親切之感，可是，卻也相當造成結構與故事上雷同的現象，並削弱了人物的真實性。」

子供時代の思い出が余りにも暗くて重苦しかったからかもしれない。琦君散文の題材はほぼ子供時代の家族内の出来事であり、小説の一部もその時期の影響を受けていた。

また、琦君小説に出てくる人物は、ほぼ公務員であり、とりわけ大学教授、学校の教員、司法関係者が多い。その原因は、台湾に移った後、琦君が裁判所と学校で仕事をしていたからである。従って仕事で触れ合った同僚や知人のすべてが彼女の創作対象となった。国共内戦で家族と離れて、台湾にきた外省人の同僚たちの孤独な晩年生活を見ていたことが、彼女にある程度のトラウマを与えたかもしれない。

このように、琦君はよく自分の周囲にいる人物や出来事を題材として、散文と小説を創作するという傾向があった。従って、全く同じ内容が、何回も琦君の随筆に出てくるばかりか、小説にも用いられている。こうした重複性は、主に小説のストーリーラインと人物の設定に表れている。

2.2. ストーリーラインの類似

本節では、琦君小説における類似したストーリーラインについて分析したい。この類似した物語のパターンは大きく四種類に分けられる。

（1）再会の悲劇。

これは、大陸時期に恋人同士だった男女が、ある原因で別れ、その後、男性はほかの女性と結婚し、遷台してから元の女性と再会するという物語である。「水仙花」（『琴心』、1954年）、「蘭陽恋」（原題：「做了爸爸以後」）（『聯合報』、1954年5月22日-6月2日）、「探病記」（『聯合報』、1960年8月18日-30日）、「做媒」（『文与情』、1990年）の四篇がある。

1949年当時、戦乱のため、大勢の人々が家族と離ればなれになって、台湾にたどり着いた。この種の小説は、政治的原因とも密接に繋がり、国共内戦以降の台湾の特殊な社会現象を明らかにする、非常に貴重な

資料であり、時代的意義があるとも言える。

（２）義理の親への孝行。

これは、配偶者が亡くなり、残された者が義理の父親か母親に、自分の産み親のように親孝行をする物語である。「百合羹」（『聯合報』、1956年7月24日-27日）、「岳母」（『百合羹』、1958年）と「冷月」（『自由中国』第十六巻第七期、1957年4月）の三篇である。

「百合羹」は夫が亡くなり、妻が舅の世話をする物語で、「岳母」と「冷月」は妻が亡くなり、夫が姑の世話をする物語である。ただし、「岳母」と「冷月」の結末は正反対である。ここで注目しておきたいのは、この三つの小説が発表された時間が非常に近く、しかも全て同じ小説集『百合羹』に収録されたということだ。

（３）道ならぬ恋。

これは、年下の甥が兄嫁と恋に落ちる物語である。「菁姐」（『菁姐』、1956年）と「紫羅蘭的芬芳」（『菁姐』、1956年）の二篇があり、二つとも同じ小説集『菁姐』に収録されている。

「菁姐」の主人公・萱と「紫羅蘭的芬芳」の主人公・虹弟は、二人とも兄の婚約者（或は兄の妻）に片思いをしているが、相手は自分をただの弟のように思っている。前者の菁姐は、アメリカで留学中の婚約者に振られ、後者の蓉嫂は主人が死んだため、独り身になる。ここまでのプロットはほぼ一緒だが、後半から逆の結末を迎える。菁姐はたとえ婚約者に振られても、自分は相手を愛すべきだと決め、萱の気持ちを断った。一方、蓉嫂は虹弟の愛を受け入れた。

（４）恋愛三角形

これは、一女二男或いは一男二女の二つの形に分けられる。即ち夫婦と不倫相手（或は新しい恋人）の物語である。「琴心」（『國風』第七期、1953年2月）、「長相憶」（『國風』第十二期、1953年8月）、「完整的愛」（『菁姐』、1956年）、「快樂聖誕」（原題：「兩張聖誕卡」）（『七月的

哀傷』、1971年）の四篇がある。

この四篇の小説における登場人物は、全て安定した恋愛三角形を構築している。例えば、「完整的愛」における阿慧の父親、母親と母親の元恋人・幼之叔、「長相憶」における小美の父親、母親と父親の元恋人・張老師、「快樂聖誕」における宋思平、慧文夫婦と宋思平の元恋人・葉淑君である。ただ、「琴心」だけは前述の三編の小説とは違い、欠落のある二つの三角形で構築されている少し特別な小説である。この点については、第三章で詳しく分析する。

2.3. 人物設定の類似

琦君小説における登場人物は非常に少なく、ほとんどの場合、僅か数人しかない。それは彼女が描く物語が、殆ど家族内の出来事だからである。前節「（４）恋愛三角形」に述べたように、琦君は夫婦と不倫相手（或は新しい恋人）の間の愛憎を描く傾向がある。更に、もう一つ顕著な琦君式特徴は、少女という傍観者の設定である。

琦君小説に登場する少女の特徴は、物語における人物たちの愛憎とは直接的な関係がなく、常に傍観者として恋愛三角形の中の男女を見守りつつ、いざという時に介入することである。ここで注意しなくてはならないのは、少女が登場する18篇[6]の小説は、「快樂聖誕」を除いて、全て一人称であるということである。

この18篇の小説は、四種類に分けられる。

（１）両親の三角関係に介入する子供。「琴心」（『國風』第七期、1953年2月）、「長相憶」（『國風』第十二期、1953年8月）、「完整的愛」（『菁

[6] 本文中に言及した18篇の小説は「琴心」、「長相憶」、「梅花的蹤跡」、「阿玉」、「完整的愛」、「清泉曲」、「七月的哀傷」、「紅燭」、「媽媽離家時」、「燈下」、「春陽」、「莫愁湖」、「喜事重重」、「錢塘江畔」、「橘子紅了」、「十分好月」、「男朋友」、「快樂聖誕」である。

姐』、1956年)、「快樂聖誕」(原題:「兩張聖誕卡」)(『七月的哀傷』、1971年)の四篇がある。

ここに描かれるのは、物事を見極める少女である。作者は少女という登場人物を設定し、夫婦の間に介入させ、婚姻関係を立ち直らせる。例えば、「完整的愛」における母親の恋愛を邪魔する阿慧、「長相憶」における父親の元恋人・張老師を追い出す小美、「快樂聖誕」における父親の友人・韓子豐と一緒に両親の婚姻関係を立ち直らせる小慧などである。また、主人が亡くなり、寂しげな母親に新しい恋愛のチャンスを与える「琴心」の小婉のような例もある。

(2)半虚構的小説の中にいる幼い琦君。「阿玉」(『菁姐』、1956年)、「清泉院」(原題:「清泉曲」)(『百合羹』、1958年)、「七月的哀傷」(『聯合報』第七版、1964年12月18日-23日)、「莫愁湖」(『繕校室八小時』、1968年)、「錢塘江畔」(『錢塘江畔』、1980年)、「橘子紅了」(『聯合文學』三十二期、1987年6月)、「十分好月」(『文與情』、1990年)の七篇がある。

これは基本的に琦君の幼年時代、或いは青年時代の思い出に題材している自伝的な小説である。主に民国初期の江南を舞台として、旧社会の大家族制度下の愛憎を描いている。このパターンに描かれた少女にも大人の恋愛に介入することがある。しかし、前者の(1)と比べると、(2)に描かれた少女は、比較的に弱く無力で、何も出来ず、ただ悲劇の発生を見ているだけである。

(3)少女が主人公のショートショート。「紅燭」(『琦君小品』、1966年)、「媽媽離家時」(『琦君小品』、1966年)、「燈下」(『琦君小品』、1966年)、「春陽」(『繕校室八小時』、1968年)、「喜事重重」(『七月的哀傷』、1971年)、「男朋友」(『中國時報』第二十七版、1993年8月23日)の六篇がある。

小説の筋は非常に簡単で、ほぼある家庭内で起こった小さな出来事

を描写する物語である。物語の主人公は全て少女で、第一人称の視点からストーリーを推進する。このパターンは琦君が若い読者のために描いた青年向けのショートショートだと推測される。

（4）聊斎志異のような怪異談。僅かに「梅花的蹤跡」（『琴心』、1954年）の一篇しかない。

この小説は、少女・私と少女の先生・邱老師の二重の視点で構成されている。つまり、これは二重の一人称を持っている小説である。物語の筋は、ある日少女である私が、邱老師の家を訪ねた時、美しい絵を見た。邱老師は、何十年か前の韓梅という不思議な少女との出会いを語り始める。「梅花的蹤跡」は琦君小説の中で、最も芸術性の高い一篇だと考える。

以上述べてきたように、琦君は創作上の同質性が極めて高い。この同質性／手慣れた手法は、琦君が創作する際、作品に注いだ様々な無意識――或は執着と言い換えられる――である。一方、この同質性はいくら高くても、若干の区別があるのではないだろうか。例えば、「長相憶」、「快樂聖誕」、「完整的愛」及び「琴心」の四篇の小説とも、恋愛の三角関係と少女が両親の婚姻関係に介入するという二つのプロットを持つ。しかしながら、これらの小説には、異なる描写も少なくないのである。

3. 三角関係における少女の役割

本章では、（1）の両親の三角関係に介入する子供における四篇の小説に対象を絞って詳しく分析をしてみたい。再度確認しておくと、ここで言及した四篇の小説における登場人物は、全て安定した恋愛三角形を構築しているということである。即ち夫婦と不倫相手（或は新しい恋人）の三人である。

父親を事件の中心人物として描く二篇の小説「長相憶」と「快樂聖誕」は、何年かのちに元恋人と再会し、恋が再燃するという物語であ

る。一方、母親を事件の中心人物とする「完整的愛」と「琴心」のうち、前者は、父親が浮気をし、母親は元の恋人と再び恋に落ち、後者は、父親が亡くなり、母親はほかの男と出会い、第二の人生を展開しようとする。

3.1.「完整的愛」: 破壊された二つの半身

主人公阿慧の母は、幼い頃から阿慧の祖母により勝手に遠縁の従兄（阿慧の父親）と婚約させられていたものの、大学で幼之叔と出会い、恋に落ちた。しかし阿慧の祖母の強烈な反対で、結局二人は別れた。阿慧の母は実家へ帰り、従兄と結婚した。ところが、阿慧の父は、女好きで全く責任感のない男であった。彼は何回も家を出て、浮気をし、お金を使い切ると、また家へ戻ってきて妻に借金をする。これを何回も繰り返した。

阿慧の両親は最初から、お互いに愛情を持っていなかったとも言える。今、阿慧の父が妻子をかえりみない所に、幼之叔も戻ってきた。二人の恋が再燃するのは当然なことだが、阿慧は外来者としての幼之叔に嫉妬し、二人の接触を妨げた。たとえ彼女が父から自分と母が捨てられることを知っていても、自分は「是爸爸的孩子，她（母親）不想爸爸，是不是也將不愛我了呢？幼之叔究竟是一個不相干的第三人，他喜歡媽，就一定不要我了。」[7] という恐怖感に囚われている。阿慧の父は妻と娘に全く無関心にもかかわらず､阿慧は自分が父の子だから、たとえ父に捨てられても、母は父を愛すべきだと思っている。

彼女は幼之叔にこう言う。「幼之叔，請你不要和我說！我不懂得這許多，我只覺得我心裡所要的愛不能被旁人分去，媽應該只屬我一個人的，況且我還有自己的爸爸呢！」[8] 子供は男女二人が結ばれた産物であり、同時に両親それぞれの半分の＜体＞を持つ。もし両親の一人がもう一

---

[7] 琦君「完整的愛」『菁姐』（今日婦女月刊社、1956年）、172頁。

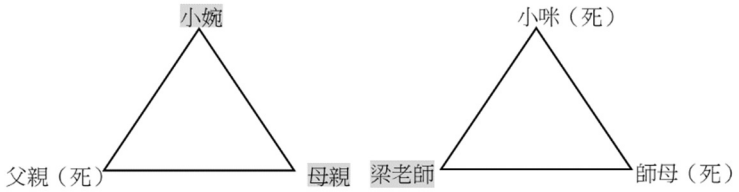
[8] 琦君「完整的愛」『菁姐』（今日婦女月刊社、1956年）、180頁。

人を捨てたら、子供にとって自分の命／体が引き裂かれるのと同様であろう。かつて両親から与えられた命／体は、父親に捨てられたせいで、もはや半分しか残っていない。そして現在、母親も他の人に奪われる可能性があるという未曾有の恐怖感が、彼女の心を襲う。阿慧は残った半分の命／体が、外来者の侵入でなくなるかもしれないと恐ろしく感じる。

よって、阿慧は幼之叔が本気で母親のことを愛し、自分が娘（或いは友達）のように扱われると分かっていても、わざと幼之叔の心を傷つける言葉を言った。そして泣きながら母親に哀願した：「你知道我多麼愛您，我也要您只愛我一個人。」[9] 阿慧にとっては、父親の裏切りよりも、目の前で母が他の男に奪われることの方が、苦しいことである。故に、母の恋愛を妨害するのは、家庭関係を壊された阿慧が、自分の存在価値への疑いから自分を守るための手段であった。創作活動に直接的な影響を与えたと考えられる。

3.2.「琴心」：恋愛三角形の壊滅と再構築

「琴心」は本論文で言及した四篇の小説の中で、唯一第二の人生を迎える物語である。しかしその前提は、浮気ではなく、死別であった。この小説の最も特別な部分は、本来円満な二つの三角形が、家族の死で崩壊したことである。小婉と小婉の母親は父親／夫を失い、梁老師も妻と娘を失っている。つまりこれは、欠損状態にある二つの家庭の三角形で構成された物語である。



9)　琦君「完整的愛」『菁姐』（今日婦女月刊社、1956年）、174頁。

琦君は、自分なりの創作手法で、家族が亡くなったために（小婉の父親、梁老師の妻と娘）壊された二つの三角形を、再構築した。その手法は、＜完整＞と名乗る愛である。愛する妻と娘を失い、二度と曲を創作できぬ音楽家の男（梁老師）と父が天国へ行った寂しげな小婉が、霊園で遭遇した。梁老師は小婉に死んだはず娘の顔を見、小婉に話しかける。

> 妳知道我非常愛你嗎？妳的愁容，妳的笑靨都使我重新看見小咪，你幫助我尋回了舊時的靈感。看見妳，我覺得小咪逐漸在長大了。她的天才將會有更大的發展。小婉，你必須加倍努力，我將以全心靈來灌溉妳。[10)]

梁老師は小婉の身を通じ、娘の小咪が復活しているという錯覚を感じた。彼は再び曲が創作できるようになった。死んだはずの小咪の命と音楽の才能が、梁老師の心の中で復活したのは、小婉という身代わりが見つかったからである。

同時に、小婉も梁老師の身に父親の愛を見つけこう感じた。

> 我被感動得說不出一個字來，只是依在他身邊，讓眼淚沾濕了他的襟袖。我似又仰望到父親的慈容，充分享受著他的愛撫。「梁老師，我也是非常愛您的，只是以前不怎麼覺得罷了，從今以後，我也傾全心靈愛您，梁老師，讓我來作您的小咪，答應我，快樂起來吧！」[11)]

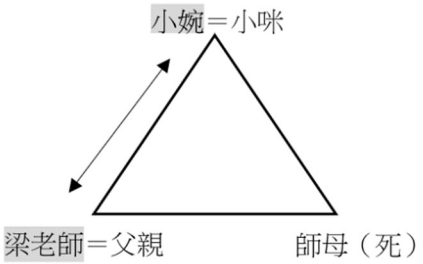
小婉は、自分が梁老師を愛することになるとは思わなかった。二人は単なる知り合いにすぎないからである。しかし、梁老師が小婉にヒントを与え、梁老師のことを父親として尊敬すべきだと思わせた。即

---

10) 琦君「琴心」『琴心』（国風雑誌社、1954年）、132頁。

11) 琦君「琴心」『琴心』（国風雑誌社、1954年）、132頁。

ち、梁老師は小婉という肉体の容器に、小咪の魂を注いで、二つの欠損した三角形を初歩的に一体化させた。小婉と梁老師はお互いに相手を、＜父親＞と＜娘＞として見た。



その後、小婉の母親は、梁老師が完成させた夫の未完成曲を聞き、「一年了，都沒像今晚這麼清晰地看見他的面容，聽見他的聲音，孩子，告訴我，這曲子是真的續下去了嗎？」[12] と小婉に言った。小婉は人と触れ合うのが嫌いな母親に、梁老師を紹介したいため、勝手に梁老師を誘うことに決めた。母親が拒否するのを心配したが、意外と母親は少し驚いただけであった。梁老師は父親の代わりに、母親を愛してくれると、小婉は思った。しかし、心の中では多少不安があるため、父親の墓の前で祈った。

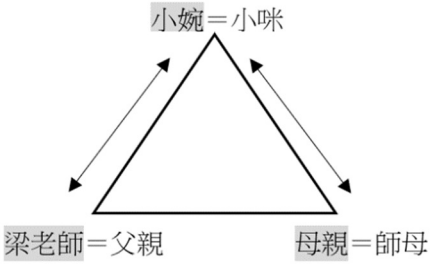
> 「爸，求您告訴我，這是不是您的意旨和安排，是不是您重新撒下幸福的鮮花，使青春長駐人間。媽愛您，我知道。媽永遠只愛您一個人。這永恆的愛是不會消逝的。正如您的曲子，您的詩篇，將永遠灌溉著媽的心。可是我盼望媽的心田裏再滋長出一枝嫩苗，那是愛情的延續，生命的再創造，也是您神靈佑護下的奇葩。爸，答應我，讓我們充分享受人間至愛吧！」[13]

---

12) 琦君「琴心」『琴心』（国風雑誌社、1954年）、136頁。

13) 琦君「琴心」『琴心』（国風雑誌社、1954年）、139頁。

小婉は祈りをささげた後、父親からの啓示をもらった気分になった。物語の最後において、小婉は母親と梁老師の演奏を聴きながら、「爸！您偉大的歌曲完成了！」[14] と呟いた。ここで、梁老師と小碗の母親はお互いに相手の身に＜妻＞と＜夫＞の魂を見つけた。二つの欠損した三角形がやっと一つになる。



3.3.「長相憶」: 母親との同一化

主人公小美の母親は病気がちのせいで、家事も育児もできない。親戚は家庭教師を雇ったほうがいいと勧め、張老師を小美の母親に推薦した。張老師は小美の家での初日、家族全員に非常な好印象を与えた。小美も小美の母親も、この綺麗で穏やかな若い女性を好きになった。しかし、いつも礼儀正しく紳士的な父の反応が、普段とちょっと違うことに、当時の小美は気づいた。だが、その微妙な違和感はあっというまに頭の中から消え去り、張老師と一緒に楽しい日々を送る。ある日の朝、小美が母親のベッドで寝た時、母親は小美にこう言った。

「我現在可真是舒服透了，小美我就只擔心一件事。」媽有一天早晨躺在床上，望著張老師牽著弟妹走出房去的背影說。

「擔心什麼呢？」我奇怪地問。

「擔心有一天張老師要結婚了，她就不能再幫我們的忙了！」媽

[14] 琦君「琴心」『琴心』(国風雑誌社、1954年)、141頁。

笑著說。

「張老師要結婚！」我呆了半晌。我就從沒有想到這個問題，我只覺得張老師就該一直和我們在一起的。我們怎麼能再沒有她呢！我固執的說：「不會的，媽，看張老師那麼怕羞，那麼文靜的一個人，怎麼會結婚呢！」

「傻孩子，她年紀也不小了，難道一輩子當家庭教師嗎？」

從那以後，我就老擔著一件心事，生怕張老師要結婚。我開始注意起她的行動來，看她是不是有男朋友來約會。她的信，我總儘可能親自從綠衣人手裏接過來，仔細辨別是不是男人的筆跡，然後再交給她。[15)]

母親が張老師はいつか結婚するかもしれないと、小美に教えなければ、小美は多分こういうことを、自分で意識することができなかったであろう。小美の無意識を喚起したのは、母親である。しかし、なぜ母親はわざわざこういうことをしたのだろうか。

母と娘の精神分析理論によると、子供は両親の人生上の不都合から生じたのであってはならない。つまり、もし子供が「実現しなかった」夢の場と化すならば、その子はもはや「その子」ではなく、「あなた」自身になるだろう。しかも、その子はその子自身の欲望とは無縁なものとなるかもしれない。[16)] 子供と同じ性の親が子供と同一化しようとするようなことがよく起こる。つまり、小美の母親は無意識のうちに、自分の娘である小美を自分と同一化した。母親はすでに小美を、自分の叶わない願望を実現する手段／もう一人の自分と見なした。そして、この小さな分身／少女は本体／母親が持っていない能力を持っている。それは、自由自在に本音を話しても誰も彼女に罪を問わないとい

---

15) 琦君「長相憶」『琴心』（国風雑誌社、1954年）、144頁。

16) クリスティーヌ·オリヴィエ 著、大谷尚武文／柏昌明 訳『母と娘の精神分析――イヴの娘たち』（法政大学出版局、2003年）、13頁を参照した。

う特権である。これは「自分の子供に自己を投影する」行為である。親は絶えずこの子に取って代わり、子供は自分の立場を見失い、割り当てられた立場に合わせて行動するようになる。[17] よって、小美は張老師が他の男に奪われる可能性があることに気づいて以来、毎日神経質的に張老師の動きを観察していた。結局、小美は我慢できず、張老師に彼氏がいるかどうか訊いた。張老師はやっと数十年前のことを言い出した。相手は小美の父親であった。

その瞬間、小美の張老師に対する感情は、好意と信頼から、裏切られたという感情に変化し、両親の関係に脅威を与える恐怖心も感じた。娘と母親の繋がりは強い。同一化を通し、このつながりが更に深まる。よって、小美はもはや娘としての立場だけでなく、女性／妻としての立場からも、外部から来た女である張老師に対し、強烈な抵抗感と競争意識を感じるようになった。これは母親と娘の同一化の上で成立した、外部の女性からの脅威に対する、エディプスコンプレックスの一種の表現である。あまりの怒りと恐怖心から、小美は張老師に渡した付箋にこう書いた。「張老師，自從你到我家後，表面上每個人都快樂了，可是內心裏每個人都很痛苦。我希望你快快離開我家，永遠不要再回來。」[18] それが、張老師が小美の家から離れる決定的な原因になった。

小美の母親は、物語の中に三回登場する。第一回目はすでに述べた。第二回目の場面を見てみよう。

> 「他白天工作太辛苦，寫文章又傷腦筋。我身體不好，照應不了那麼多，還幸得有張老師樣樣都為我代勞了。」她繼續說。
>
> 提起張老師，我心裏一跳，不由得怔怔的望著媽問：「媽，你覺得張老師這個人怎麼樣？」

---

[17] クリスティーヌ·オリヴィエ 著、大谷尚武文／柏昌明 訳『母と娘の精神分析――イヴの娘たち』（法政大学出版局、2003年）、13頁を参照した。

[18] 琦君「長相憶」『琴心』（国風雑誌社、1954年）、152頁。

「再好也沒有了，她如果結婚的話，就是一位標準的賢妻良母。」媽一臉的懇切。

「她為什麼不結婚呢？她年齡也不小了。」

「我怎麼知道？」媽一笑：「你們這麼好，她沒跟你談嗎？」

我滿肚子的話正想衝口而出，可是轉念一想又復忍住了。

「媽，你有沒有覺得張老師近來不快樂？」

「各人有各人的心事，也許她有她的身世之感，她如果不跟你談，你就別追問她。」

「如果她要走的話，你留她嗎？」

媽詫異地望著我，我躲開她的目光，極力裝鎮靜的樣子。

「她說過她要走嗎？」

「嗯！不過我想你不會放她走的，尤其是爸爸。」最後一句話，我說得低到連自己都快聽不見了，我不知道媽是否已聽見。我偷偷的望著她的臉，她的態度莊嚴而平靜，眼裏露著惋惜的神情。」

「如果她真的要走的話，我們也沒辦法強留她。」[19)]

今回も母親が自ら小美に張老師のことを話す。母親はもし張老師がいなければ、誰も主人を世話する人がないことを認める。一方、もし張老師自身が離れたいなら、自分は引き止めないだろう、と小美に伝える。

最後に、三番目の場面に注目したい。これは小美と父親が駅で張老師を見送り、家に帰った物語の最後のシーンである。小美は牛乳を持ってくる途中、門の外で以下の対話を聞いた。

「你知道了卻為什麼從沒有向我表示？」是爸的聲音。

「我何必說呢！那不是傷了大家的感情嗎？」是媽的低語。「況且，我讀了你的文章，明知道你們的感情不是一朝一夕的事，我忍心那樣做嗎？」

---

19) 琦君「長相憶」『琴心』（国風雑誌社、1954年）、151-152頁。

「你太懂得我了。」爸感慨的説。「經過這一次的事，我對你更深一層的了解，也更深一層的敬愛。」

我這才明白媽原來已知道張老師和爸的事，她竟是如此不動聲色，安祥而和善，媽是多麼偉大，我不由得對她肅然起敬。[20)]

この引用から分かるように、母親は既に事実を知っていたが、自分が表に出ないよう、自分に同一化した自由自在な娘を利用し、全体をコントロールしていた。その結果、小美はまだ子供のため、誰も彼女に罪を問わなかった。一方、母親も夫の愛を手に入れた。これは単なる妻としての勝利のみならず、娘の父親に対するエディプスコンプレックス的な勝利でもある。

3.4.「快樂聖誕」: 人格の分裂と同性愛の可能性

この小説も一男二女と少女から構築された物語だが、「長相憶」と違うのは、恋愛三角形（宋思平、慧文夫婦と葉淑君）の外にいる男性を一人称の視点とした物語である点である。主人公の韓子豐は、宋思平と葉淑君の大学時代の友人であり、昔から葉淑君に片思いを懐いていた。独身の韓子豐は公務員であると同時に、アマチュア作家でもある。また、宋思平と妻の慧文の間には、小慧という娘がいる。物語では、小慧が登場するシーンはすべて韓子豐と一緒である。彼女は父親が葉淑君と結婚するのをやめるよう韓子豐に頼んだ。

小慧は＜憎恨＞という言葉で、葉淑君を形容する。

「如果爸爸不跟葉淑君要好，就不會跟媽媽離婚的，我好恨葉淑君啊！」

「小慧，你別恨葉阿姨，她跟你爸媽離婚的事毫不相干，是他們離婚以後，你爸爸才跟葉阿姨好起來的。」

「鬼才相信，他們本來就是同學，已經偷偷相愛好多年了，他既

---

20) 琦君「長相憶」『琴心』（国風雑誌社、1954年）、159-160頁。

然愛她，又何必跟媽媽結婚呢，現在害得媽媽跟我這麼痛苦。」[21]

一方、小慧は葉淑君のかわいらしさも承認せざるを得ない。「葉阿姨是個可愛的女人，如果她不跟我爸爸結婚，我是會非常非常喜歡她的。」[22] 恐らく、小慧の心の中には、葉淑君に好意を持つ面がある。美しい女性からの威脅を感じ、相手に敵意と競争心を持つと同時に、思わず相手のことを好きになってしまったのだ。こうした愛と憎しみを感じる少女は、無意識に第三者が恋愛の闘技場から引き下がるように祈った。そうすれば、相手への憎しみも自分への罪悪感も自然になくなるであろうと思ったのである。少女は、両親の仲直りを祈りながら、第三者が幸せをもたらすことに期待した。

琦君の父親は、正妻の外に、三人の妾がいる。その中、一番琦君と母親を苦しめたのは二姨娘である。その二姨娘が琦君と母親の人生に出現して以来、彼女は父親に捨てられてしまうと感じ、父親の愛を競って敗北を体験した。ホーナイの理論によると、「こうした男性獲得の努力に、他の女性に対する永久的、かつ破壊的な対抗心が付随している点には、すべての競争に共通する心理が認められる。つまり、敗北者は勝利者に対して消えることのない怒りを抱き、自尊心を傷つけられ、後につづく競争場面では、心理的に一層不利な立場にたち、ついには競争相手が死なぬかぎり自分には成功のチャンスがないと、意識的または無意識的に考えるようになる。」[23]

しかしながら、一人の女性である琦君は、同性に共感もしていた。こうした愛と憎しみが共に存在する対立的な感情に基づいて、琦君はこの「快樂聖誕」を通じ、第三者にもう一つの可能性を与えた。即ち、

---

21) 琦君「快樂聖誕」『七月的哀傷』（驚聲文物、1971年）、117-118頁。

22) 琦君「快樂聖誕」『七月的哀傷』（驚聲文物、1971年）、123頁。

23) 安田一郎、我妻洋、佐々木譲 訳『ホーナイ全集Ⅰ』（誠信書房、1982年）、238頁。

第三者は身を引いても、幸せになれるということである。既に言及したように、小慧が登場するシーンは全て韓子豐と二人きりである。琦君と同様に小説家である韓子豐と少女の身分を持つ小慧は、作家の琦君の分裂した二つの人格と見られるであろう。小説家と少女の対話を通し、父親を競って敗北した挫折した心を治療するのは、こうした設定の一つの功能である。小慧が韓子豐に葉淑君に告白するよう提案した時、韓子豐は小慧にこう言った。「你想得太天真了。人又不是棋子，由得你擺（佈）。」[24] しかし、物語の結末は、全て小慧の思い通りになった。父親は元の鞘に収まったのである。

この設定のもう一つの功能は、作者が韓子豐／男性という身分の設置を通し、第三者の女性を救うことである。相手にハッピーエンドを与えることで、琦君は女性への同情を呈示する。これは、同性愛の一種の表現とみられる可能性もあるであろう。

3.5. 一人称と少女の物語における役割

3.5.1 自分の過去を書き直す

琦君の随筆は幼年時代の出来事を描写することで知られている。彼女が一番よく書いたのは故郷の浙江を背景としたユートピア的な随筆である。琦君の随筆も小説も、幼年時代の影響から離れられない。つまり、両親の不幸な婚姻関係が彼女に与えた心的外傷である。琦君はいつも作品の中で、繰り返し＜愛＞と＜完整＞を謳っている。だが、彼女の作品に現れるのは、いつも＜欠損＞である。愛は琦君にとって、永遠に手の届かぬ夢であった。

その愛は「各人の幻想の直接的で永続的な制御下にある。そして幻想とは、私たちのひとりひとりが赤ちゃんで、何かまたはだれかが欠如したときに頭のなかでつくるすべを学んだ一種の代償の夢である。（中略）ごく小さかったときに、自発的で内的な働きによって、私た

[24] 琦君「快樂聖誕」『七月的哀傷』（驚聲文物、1971年）、118頁。

ちは『欠如』を糊塗するすべを学んだ。そして私たちそれぞれは異なった欠如の結果として、自分のために理想的な対象を徐々に創造していった。そして自分を幸福にするのに適したあらゆる美点で飾り立てるのである。欠如が多ければ多いほど、幻想は重要になり、愛は理想的になる。」[25)]

よって、創作が琦君にとって、夢／幻想を作る手段であった。随筆では、醜い真相は消され、美しい部分しか残されていない。小説では、夢造りの空間がいっそう大きくなっていた。随筆が意識的に昔のことを反復して回想しながら､醜い真相を消すことができるとするならば、小説は彼女が全ての意識を一旦排除し、虚構を通じ、現実の世界から脱却し、実在しない人物を創造できるのである。

小説の世界では、琦君が神様のような力を持つ。彼女はあの小さくて弱い、何の力もない昔の子供時代に戻り、もう一度両親の婚姻関係に介入し、守ってあげるようになった。そうすれば、自分も救われるかもしれないと思えた。これが子供を一人称とした小説の功能であろうと考える。

3.5.2 小説と称する男根

物語における少女のもう一つの役割は、復讐であろう。琦君は女性であり、しかも幼年時代に、父親からの心的外傷を受けたことがある。子供は「これらすべてのことに対して比較的に無力です。つまり子供はこの怒りを外部に発散することがぜんぜんできないか、非常にわずかな程度しかできませんし、知的な理解によってこの経験に取り組むこともできません。こうして怒りと攻撃性は彼の中にたまって、途方もない空想になる。」[26)] 琦君は男根の去勢／女性の上に、更に父から

---

25)　クリスティーヌ･オリヴィエ 著、大谷尚武文／柏昌明 訳『母と娘の精神分析――イヴの娘たち』(法政大学出版局、2003年)、95-96頁。

26)　安田一郎、我妻洋、佐々木譲 訳『ホーナイ全集Ⅰ』(誠信書房、1982年)、

の二次去勢を受けた。彼女には相当の怒りが溜まっていたと思われる。

少女を視点とする一人称小説は、作家琦君の男根である。小説／男根を通じ、母親／女性を救うことができるだけでなく、父親／男性にも復讐／代償の夢が叶う。例えば、「長相憶」には、父親の人物像に対する以下のような描写がある。

> 我困惑的望著爸，他又站起來在屋子裏走了一圈，忽然抱著我的肩膀，顫聲地說：「小美，你是個懂事的好孩子，你應該知道我內心的痛苦。」
>
> 「可是這是一種什麼局面呢？如果有一天媽知道了的話，事情又怎麼樣好呢？」
>
> 「好幾次，我曾想請她離開，可是一看她與你媽處得那樣好，你們又那麼愛他，一種苟且的自私心竟希望她這樣在我家一輩子……」
>
> 「那麼你還愛媽嗎？」我迷茫的問。
>
> 「孩子，也許你還太年輕，你不能懂得這許多。我和你媽之間是同甘苦共患難的感情，和這種感情俱在的是道義上的責任。我們必須相互信賴忠誠，我當年之所以拒絕張老師而與你媽結婚也是為此。」
>
> 「可是您現在並沒有把全部的感情給媽媽。爸，您不能使媽傷心，我雖然懂得您，我也愛張老師。可是我更同情媽，媽身體不好，她受不起打擊。」[27)]

少女の一人称の視点で、父親の弱さと無能を描き、かつて彼女を去勢した父親を去勢しようとする。作家である琦君も、小説の書くことを通し、父親を征服する／自慰の空想を達成しようとするのである。

140頁。

27) 琦君「長相憶」『琴心』（国風雑誌社、1954年）、155-156頁。

4. まとめ

本論文では、琦君小説におけるいくつかの特徴を提出し、全く同じ構造のように見える物語に、新しい解読の可能性を示した。また、前述した四篇の小説には、全て幼い娘が両親の関係に介入する状況がある。「完整的愛」の阿慧は、父親の愛／もらった半身を失った以上、母親／残った半身を奪われるかもしれないと怖れて、母親の恋愛を邪魔した。「琴心」の小婉は、父親の墓参りの帰途、梁老師と遭遇した。二人とも最愛の家族を失い、欠損した三角形になっていた。故に、小婉と梁老師は、小婉の父親が残した未完成の曲で二つの三角形を組み合わせ、新しい三角形を作り、再び幸せを手に入れた。「長相憶」の小美は、母親から無意識を喚起されて、張老師と父親のことに気づき、最終的に張老師が自ら小美の家を離れるよう仕向けた。これは母親と娘二人の勝利である。「快樂聖誕」の小慧は、物語にはほとんど出てこない母親に代わり、父親の心を取りかえした。一方、両親の結婚を破壊した女性にも同情を示し、幸せな道を与えたのである。

［追記］本稿は、2019年7月6日、第84回大阪市立大学中国学会（於大阪市立大学文化交流センター）において研究発表を行った際の原稿をもとに、加筆、修正を加えたものである。当日、貴重な意見を頂戴した方々にこの場を借りて御礼申し上げます。